第５章　小串構内医学部看護婦宿舎改修に伴う試掘調査

１　調査の経過

調査地域はキャンパス北東端部に位置する。周辺地域では昭和58年度に実施した体育館新営に伴う試掘調査[1)]の際、旧石器時代のナイフ形石器、削器、細石核、剥片および鎌倉時代後半から室町時代にかけての土師器、瓦質土器が包含層から出土しており、体育館、学友会館およびテニスコートを含む地域が遺物包含地として周知されるに至った。

しかし、同キャンパスを東西に二分する市道以東の地域では、本稿で報告する看護婦宿舎を含む職員宿舎および野球場の地域での調査が行なわれていなかったため、埋蔵文化財の分布状況は容易に把握できない状況であった。

今年度に至って、看護婦宿舎改修の工事計画が具体化したのに伴い、埋蔵文化財資料館は埋蔵文化財資料館運営委員会の議を経て、関係部局と協議し、試掘調査を実施することとなった。

工事内容は宿舎内の模様替えを主体とするものであるが、宿舎内の北端中央部では昭和58年度の調査で検出した包含層の上面にまで達する、現地表から約 2.3ｍの掘削を伴う工事が計画された。これに伴い、工事によって埋蔵文化財へ影響が及ぶ恐れのあることが十分考えられ、また、職員宿舎地域で事前に埋蔵文化財の有無および土層の堆積状況を把握し、予想される今後の開発工事に対して埋蔵文化財に関する具体的な資料を得る必要があることなどから以下に述べる二箇所の地点で12月９・10日の二日間試掘調査を実施した。

現地表から約 2.3ｍの掘削を要する約４×３ｍの洗面所が新営される地点（第一地点）では、掘削深度に加え、激しい湧水をみる同キャンパスにおける過去の調査から表土除去

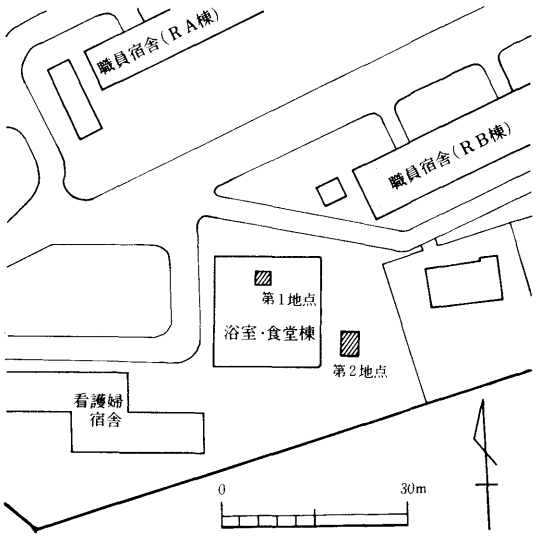


Fig. 28　調査区位置図

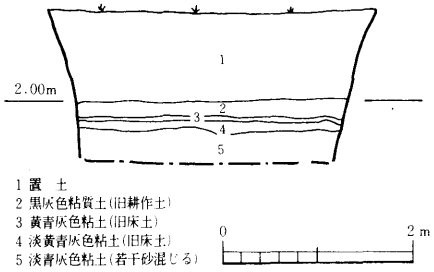


Fig. 29 土層断面図

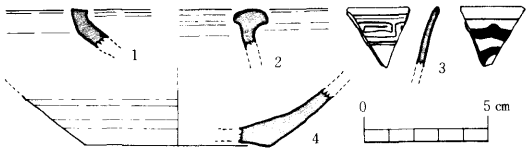


Fig. 30 出土遺物実測図

後の人力による掘削には限界があり、かつ、この部分に既設の建物が存在しており、すでに攪乱を受けている可能性もあることなどから、土層の堆積状況および、昭和58年度の調査で検出した遺物包含層の有無等の把握を主眼として、機械を使用した分層発掘を行なった。

また、同時に看護婦宿舎東側の砂場約 4.5× 3 mの地点（第二地点）では、機械を使用した表土除去ののち、人力による分層発掘を実施した。

2 層 位

第一地点では上層から攪乱土、旧耕作土および旧床土の順に堆積が見られる。旧床土の下位にあたる現地表下約 1.7mで58年度の調査の際、旧石器時代および鎌倉時代後半から室町時代の遺物を包含していた厚さ約40cmの青灰色粘土層が検出されたが、当地点では遺物は出土しなかった。その直下は工事による掘削深度である現地表下約 2.3mまで土層の堆積状況を観察したが、地山は検出されず、枝木、木葉などの多数の植物遺体を含む厚さ約20cmの黒褐色粘土層が堆積している。

第二地点では現地表下に厚さ約95cmの構内造成時等の攪乱土が堆積しており、その下位に旧耕作土および旧床土が残存している。旧床土は 2 層認められ、その直下に第一地点で検出された若干砂混じりの青灰色粘土層が現地表下約 1.2m、標高約 1.7m付近に堆積している。湧水が激しく厚さ約40cmまでしか掘り下げられなかったが、青灰色粘土層からは近世の陶器若干が出土した。

3 遺物 (Fig. 30, PL. 20－(4))

1 ～ 3 は陶器。1 は茶入で、短く立ち上がる口縁部をもつ。器肉は薄い。口縁部内外面に赤黒色の釉を施すが、蓋を有するものと思われ、口唇部は口禿となっている。素地は淡赤灰色を呈し、緻密である。2 は小型の壺の口縁部で楕円形に近く肥厚する。口縁部内外

Tab. 5　出土遺物観察表

No.	器　種	口径 *底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色調 素地	色調 釉	胎土	焼成	備考
1	陶器・茶入	—	(1.5)	暗赤灰色(7.5R4/1)	赤黒色(2.5YR2/1)	精良	良好	
2	磁器・壺	—	(1.7)	灰白色(2.5Y8/1)	浅黄色(7.5Y7/3)	精良	良好	
3	陶器・鉢	—	(2.4)	赤灰色(2.5YR6/1)	暗赤褐色(2.5YR3/3)	精良	良好	皿か
4	磁器・埦	*7.5	(2.3)	灰白色(2.5Y8/2)	明緑灰色(5GY8/1) 染付-青灰色(5B6/1)	精良	良好	

面に透明な淡灰緑色の釉を施すが、1と同様、蓋を有するものと思われ、口唇部は口禿となっている。素地は灰白色。3は鉢ないしは皿の底部。茶色の釉は内面および体部上半の一部に施しており、底部付近にまでは及んでいない。素地は淡赤灰色を呈し、緻密である。4は磁器染付。埦の口縁部で器肉は薄い。外面は鮮青色の呉須で口縁部下に一条の圏線と草花文を絵描きする。内面は方画連続帯が巡る。

1～4とも19世紀代のものと考えられる。

4　小　結

今回の調査によって職員宿舎南西部の地下の状態がおおまかではあるが把握された。

すなわち、昭和58年度の調査で検出された旧石器時代および鎌倉時代後半から室町時代の遺物を包含する淡青灰色粘土層が、キャンパス北東端部にあたる今回の調査地域付近にも分布しており、両地域とも検出面の標高は約1.6～1.7m前後であった。したがって、過去の調査結果を総合すると、小串構内では現在まで未調査地域である第一・二病棟と給食棟付近の地域、野球場の地域および職員宿舎北半部の地域の三地域を除いたほぼ全域で淡青灰色粘土層が検出されたことになる[2)]。しかも、同層がグライ化した堆積層で、その包含する遺物が旧石器時代から江戸時代末までかなりの時期幅をもっており、かつまた、量的にも多くはないことなどから、低湿地に堆積する二次的な自然堆積層であるものと考えられる。

しかし、キャンパス内での遺物の出土は、大学占地直前の客土である旧耕作土および旧床土以外の堆積層では同層に限られていることから、淡青灰色粘土層以下におよぶ掘削を伴う開発諸工事に対しては、遺物の包含状況を把握する必要があるものと考えられる。

さらに、職員宿舎北方に隣接して北東から南西に延びる低丘陵上には、4基検出された

箱式石棺のうちの1基から1体分の人骨とともに鉄剣1本、鉄鏃2本が出土した尾崎古墳[3]が所在するのをはじめとして、同古墳の奥部には地下式横穴が存在したといわれる小串古墳[4]などの古墳時代の遺跡が存在する。また、昭和58年度の調査でも古墳時代後期の須恵器が出土しており、今後、野球場および職員宿舎北半部の地域では、この低丘陵裾部のひろがりとともに淡青灰色粘土層の分布状況を把握することによって、同地域における遺構埋存の有無を確認する必要性があろう。

（河　村）

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館「小串構内医学部体育館新営に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年）。

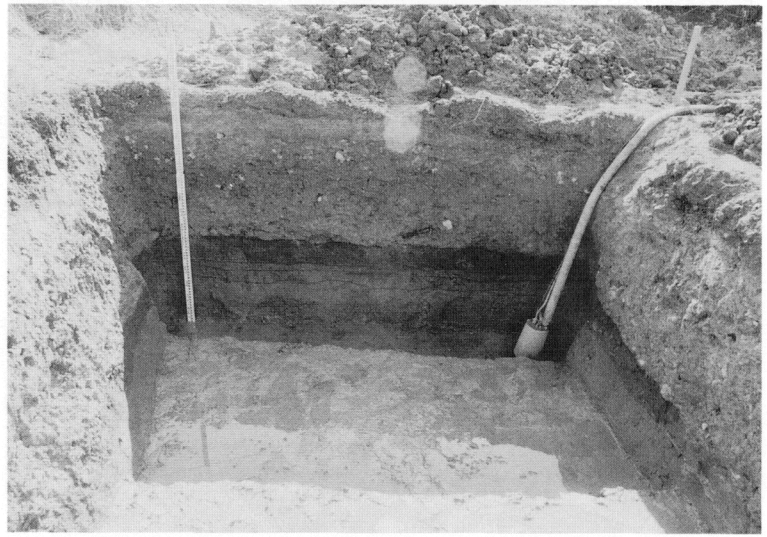
2）山口大学埋蔵文化財資料館「小串構内医学部体育館新営に伴う発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』、1985年）。
山口大学埋蔵文化財資料館「小串構内医学部基幹整備に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』、1985年）。
山口大学埋蔵文化財資料館「小串構内医学部臨床講義棟・病理解剖棟新営に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』、1985年）。

3）宇部市教育委員会『宇部の遺跡』（1968年）。

4）3）に同じ。

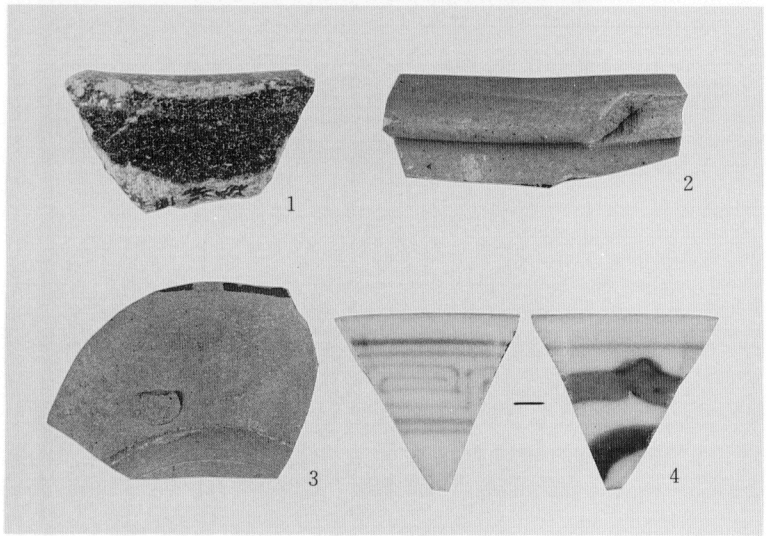
小串構内医学部看護婦宿舎改修に伴う試掘調査

(1) 第一地点全景(北から)



(2) 南壁土層断面(北から)

(3) 第二地点土層断面(北から)



(4) 出土遺物